

# 伊予二神島の近世 ——瀬戸内海における「島村」の形成——

関口 博巨

SEKIGUCHI Hiroo

## 【要旨】

戦乱の四国・瀬戸内海域を転戦した「海の領主」二神氏は、天下一統後をどのように生きたのか。本稿では、二神島と二神氏宗家（以下、二神家もしくは本島二神家）に視点をすえ、「近世」という時代を問い直す。

伊予の守護河野氏の滅亡とともに二神島へ帰った二神家は、松山藩領となった行政村「二神村」で庄屋役に就いた。歴代当主はそのほかにも、御城米船改御用や朝鮮通信使来朝御用などを担い、近世の海上交通網のなかに自らを位置づけ、長崎貿易に不可欠な煎海鼠の生産を請け負うことで、いわゆる「鎖国」政策にも適応してみせた。二神家は中世の「海の領主」から近世の「島村の庄屋」へと転身したのである。

近世の伊予では、島嶼部でも検地、村切りが実施され、行政単位の村が多数設定された。島嶼に設定された行政村を、本稿では「島村」と呼び、いくつかの類型を想定した。「島村」のひとつの典型を示す二神村は、二神島のほか由利島をはじめとする複数の無人島からなり、その島々の領有を根拠に忽那諸島でも最大規模の海域支配を誇った。

二神島の人々は、村域の海と山から計り知れない恩恵（鰯・海鼠・材木・石材・野菜など）を受けていたが、一八世紀に入ると、伊予本土における農業生産力の向上を目論む松山藩が由利島を肥草山として収公しようとたびたび画策したため、二神家歴代当主はこれに粘り強く抵抗している。

とくに種章にとって、松山藩との命懸けの駆け引きは、二神家や忽那諸島の歴史に向き合う契機となった。安永年間以降、各種古文書の写しや『予陽河野盛衰記』などの写本類を数多く収集し、「豊田二神藤原氏系図略」や『油利島録』などの系図・由緒書類をまとめあげていく。種章による「二神島庄官」という自称は、それらの編纂過程で醸成された自意識にはかならない。その自称には再解釈された「海の領主」の矜持が垣間見える。

〔キーワード〕 庄屋、由緒、海賊、島

## はじめに——二神村にみる「島の近世」

中世後期、伊予国守護の河野氏や海賊衆の領袖であった来島村上氏に従って、戦乱の四国・瀬戸内海域を転戦した「海の領主」二神氏は、豊臣秀吉や徳川家康による天下統一後の「近世」をどのように迎え、どのように生き抜いたのだろうか。瀬戸内海に浮かぶ二神島に視点をすえ、近世という時代を問い直してみたい。

中世以来諸流に分かれていた二神氏の一族は、近世の中興・通範の嫡流（二神氏宗家）で忽那諸島二神島に暮らした本島二神家のほか、風早郡柳原村の柳原二神家、同郡片山村の片山二神家、忽那島吉木村の吉木二神家など、各地に進出して独自の「家」を形成していた<sup>〔1〕</sup>。

このうち、片山二神氏が従った来島村上氏は、戦国時代には伊予国守護の河野氏の重臣であったが、来島を名乗った村上通総（一五六一―一五九七）が豊臣方に通じるなど幾多の曲折を経て、慶長六年（一六〇一）に日田・玖珠・速見三郡の内陸部に領地を有する豊後国森藩一万四千石の大名に収まり、通春の時代の元和二年（一六一六）には久留島を称するようになった。片山流の豊後森二神家は廃藩置県までこの久留島家に仕え、なかには伊予の名族「得能」姓を許された者もいる<sup>〔2〕</sup>。

一方、二神氏宗家が仕えた河野通直（一五六四―一五八七）は、来島通総ら恩顧の家臣たちに裏切られ、天正一三年（一五八五）の小早川隆景を主将とする豊臣秀吉の四国征伐で降伏し、所領を奪われた。安芸竹原に隠遁した通直は、同一五年七月に病死し、伊予の名族河野氏の正系はここに断絶した。主君を失った二神氏宗家は、二神通範・通種を経て家種の代までに本貫の二神島に戻り、近世の行政村「二神村」を庄屋として差配することになる。その間の略系譜は、図1に示したとおりである。

同じ二神一族でありながら、片山二神氏の一流は海を捨てた武士とし

…	二神通範（元和二年七月没）	通種	家種（近世初祖、寛永五年四月没）	種長（明暦三年九月没）	種忠（貞享五年六月没）	種次（享保十年正月没）	種永（延享四年七月没）	種信（明和二年二月没）	種章（中興、寛政六年八月没）	種福（文政三年十二月没）	種五（慶応二年五月没）	種式（慶応三年十月没）	種倫	司朗
				2	3	4	5	6	7	8	9	10		

図1 近世の二神家歴代。当主名右傍の算用数字は近世の歴代数。（典拠：「豊田二神藤原氏子孫系図」「二神村新四郎由緒親類附」「過去帳」等）

て、二神氏宗家は瀬戸内海の島で百姓の村の庄屋として、それぞれの近世を生きていく。両家は主君がたどった運命の明暗によって、いわゆる「兵農分離」の分かれ道を進んだわけだが、本稿では主に二神司朗家文書に拠りながら、近世の二神島と二神氏宗家（以下、二神家もしくは本島二神家とする）を中心に、海と島での暮らしぶりを解き明かし、各地に広がった二神一族との交流についてもあわせて展望してみたい。

なお、本稿は、二〇一〇年四月の松山島博覧会「忽那諸島・歴史探訪」事業の一環として開催されたシンポジウム「忽那諸島の歴史を探る」での報告を原稿化したものである<sup>〔3〕</sup>。

## 一 中世から近世へ——研究史の成果と課題

本稿の検討に先立って、二神氏と二神島にかんする先行研究に学び、「島の近世」の歴史の意味を問い直す手がかりを得ておくことにしよう。

### （一）中世の二神氏

「豊田藤原氏子孫系図次第」<sup>〔4〕</sup>の伝承では、伊予にはじめて居住した二神氏は種家とされる。その真偽は不明だが、二神島の安養寺（当時は浦御堂）に伝わる元徳二年（一三三〇）六月の大般若経の奥書には、大願

主として種家の子吉種（法善）の名がみえるので、一四世紀初頭には、二神氏が松島（のちの二神島）に上陸していたことは間違いないといえるよう。

本島二神家に伝わる系図類によれば、二神氏は、一四世紀中葉には河野氏に従っている。実際、二神氏と河野氏との関係は、古文書によっても確認できる。たとえば、文明十一年（一四七九）一月一三日付の河野教通宛行状<sup>⑤</sup>などは、二神四郎左衛門尉が粟井安岡分・宮崎分・友包分など、河野氏直轄領に近い伊予本土の風早郡にも所領を与えられていたことを伝えている。河野氏の被官となった二神氏は、石野弥栄氏や福川一徳氏が指摘するように、諸流に分かれて「宅並二神衆」や「風早二神衆」のような「衆」をなしたが、近世にかけては、その内部に独立した複数の「家」が形成され、やがて「衆」的結合自体は消滅していくものと推察される。

また、二神氏が河野氏から二神島作職を安堵される一方で（天文二〇＝一五五一年二月二八日河野通直安堵状）、永禄年間（一五五八～七〇）の複数の文書からは、この島に村上氏と今岡氏の知行分が設定されていたことも知りうる。伊予の地域史料を渉獵して詳細な研究を行った景浦勉氏は、河野氏と村上氏が対立したこの時期、二神氏もまた生き残りをかけて両派に分かれて争っていたのではないかと推測している。<sup>⑧</sup>

## （二）中世二神島の生業

網野善彦氏は、二神島の内部構造にも目を向けた。永禄年間の同島には浦と泊の二つの集落があり、「二神殿」は安養寺（浦御堂）と宇佐八幡宮を背景に、両集落に睨みをきかせるように居屋敷（城郭）を構えた。さらに「城山」と呼ばれた出城を警固所とし、家臣である家子衆を従える「海の領主」として、島の名主や百姓・小百姓たちのうえに君臨していた（図2）。

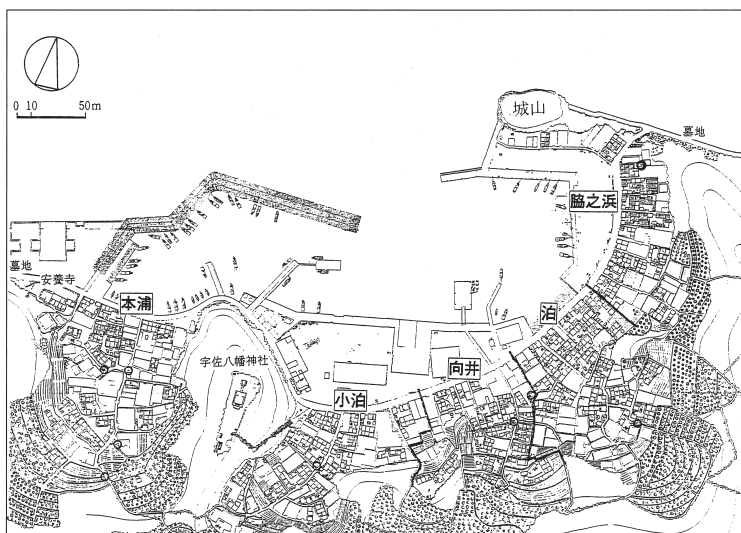


図2 二神島集落図（西和夫『建築史研究の新視点二』（中央公論美術出版、2000年）図9（加筆のうえ引用）。□囲みが現在の集落。丸印は井戸の位置）

## 〈史料1〉

### 種長名

一 たわらこ 二十五はい

二神氏のほか今岡氏と村上氏は、領主として年貢・夫錢・公事を徴収していたわけだが、では、その負担をになった島の百姓たちの生業は、どのようなものであったのか。まずは二神氏に納められた公事（年貢・所当以外の租税）に注目しよう。〈史料1〉は、永禄二年（一五五九）の二神島成物・節料等注文である。

- 一 たき木 二十五わ
- 一 ひしき 二からけ、なつなり
- 一 ともひらなし物
- 一 たわらこ 十はい たき木 十は
- 一 かき 五合 ひしき 二からけ
- 一 くす 一升
- 一 せちりやうむしろ ともひら名  
七郎左衛門名 一長
- 一 七郎左衛門名なし物
- 一 たわらこ 十はい かき 五合
- 一 たき木 十は くす 一升
- 一 ひしき 二からけ
- 一 三名してほしな
- 一 むしろニても百のつこう
- 一 今岡・村上やく人へなす
- 一 たわらこをけはうら・とまり
- 一 一年のわりニ出
- 一 自名ハ五人してかわりくたす
- 一 粟井へせちりやううら・とまりして
- 一 たわらこ九十はい
- 一 たき木 九十
- 一 かき二升 (四人して  
かやたゝミ二帳  
是者節料
- 一 ひしき六名合六からけ
- 一 くす二升
- 一 たき木八十あまりか
- 一 是ハ夏年貢十三貫と一度渡ス
- 一 六名合ひしき六からけ

一 くす二升 是ハ夏年貢と

一度ニ今岡・村上へはふんつゝなす

永禄貳年八月吉日 種長(花押)

二神島の浦と泊には、それぞれ三名ずつ、六つの百姓名が定められていた。二神島成物・節料等注文によれば、六名のうち種長名・ともひら名・七郎左衛門名の三名で、公事の流れをくむ負担のあったことがわかる。三名は「ひじき二からけ」を均等に負担したほか、ともひら名・七郎左衛門名ではそれぞれ「たわらこ十はい」「たき木十は」「かき五合」「くす一升」を、種長名では「たわらこ二十五はい」「たき木二十五は」を負担した。

永禄二年の年貢・夫錢・公事を検討した網野氏によれば、百姓負担のうち夏・秋の年貢錢と夫錢は、二神氏二、今岡氏・村上氏各一の割合で納められたが、<sup>⑪</sup>「史料1」にみられる公事は、「二神氏に納められる分が多く、今岡・村上氏にはさほど納入されていないようにみえ」、「そのかわり、この両氏に各三百文、村上二郎左衛門に六百文の国役錢が負担されており、能島の村上氏がこうした守護の賦課の流れをくむとみられる賦課を島から徴収している点」<sup>⑫</sup>に注目している。それは村上氏と公権とのかかわりを示すものであり、二神氏が「海の領主」として二神島の百姓たちにのぞみながらも、他方で村上氏の家臣の立場に甘んじていた状況を物語っている。

なにはともあれ、「島の近世」を検討する前提として、ここでは「たわらこ(海鼠)」「たき木」「ひじき」「かき」「くす」などが公事として徴収されていた事実注目しておきたい。二神島の百姓たちは、海や山から産物を採集し、必要に応じて加工して、公事として上納していたのである。

中世二神島の百姓の生業を推察させる史料はほかにもある。(史料2)

は、二神修理進と同弥五郎に宛てられた、年不詳六月三日付の得居通幸書状<sup>⑬</sup>である。

〈史料2〉

先日者船之立之木之事申候処、八十本給候、祝着候、残而廿本之儀  
頼申候、恐々謹言

六月三日

通幸(花押) □  
正治(花押)

「うき  
まいる

二神修理進殿 得右  
二神弥五郎殿

御宿所

」

得居通幸(一五五七―一五九四?)は、村上通康の子で、来島通総の兄にあたる。通幸の海域である鹿島城(北条市沖)の城代は二神豊前守が勤めていたというから、二神氏とは浅からぬかわりのあった人物である。この書状によれば、二神修理進と同弥五郎が、得居通幸から依頼された船材百本を用立てている。二神氏が何らかの形で木材の生産にも携わっていたことが推測されよう。

簡単ではあるが、(一)(二)項の検討から、中世後期の二神氏が、粟井郷宅並城で「二神衆」を率いた宗家(のちの本島二神家)をはじめ、伊予における権力機構の一翼をになっていたこと、その一方で、二神島の作職を有して「海の領主」として活躍していたことは明らかであろう。二神氏が掌握していた二神島の百姓が、海と島という条件を活かした生産や流通などの諸活動を展開していたこともあわせて確認しておきたい。

(三) 近世二神島のイメージを見直す

では、近世以降の二神島は、これまでどのようなイメージでとらえられていたのだろうか。忽那諸島の歴史を集大成した基本文献『中島町誌』<sup>⑭</sup>(以下、町誌)に描かれた忽那諸島と二神島の姿を、まずはかいつまんで紹介しておこう。

町誌によれば、天正一五年(一五八七)の戸田勝隆による太閤検地によって、忽那諸島に「近世の村」が設定され、「小農民の自立」がはかられたという。しかしながら、「非常に零細な農民によって構成された」忽那諸島の村々にとっては、戸田検地は高率の年貢を収奪する江戸時代三百年への「苦しい第一歩」にはかならないと評価されている。

江戸時代の土地台帳の分析から、忽那諸島の村々は「大きな河もなく、天水を利用する耕作であるので、近世の米中心の経済の中では生産力の低い農村」であり、当地の百姓が早くから商人や職人として出稼ぎを行っていたのは、「土地の生産性の低さと農業生産の停滞により貧窮化していく農民が、再生産を維持していく必要から展開せざるをえなかったもの」と性格づけている。

さらに町誌は、これほど生産力の低い忽那諸島のなかでも、「もっとも低位は二神村である」とも指摘している。その根拠として、米の生産力を示すとされる石盛が忽那諸島で最も低いこと、二神村百姓一人当たりの平均所持高が一石三斗余に過ぎず、しかもその半数は一石に満たないことがあげられている。町誌が描く二神村は「極貧の農村」にほかならず、河野氏滅亡後の二神氏宗家は、この村へ「帰農」したというのだ。

『中島町誌』は、太閤検地によって忽那諸島に「近世の村」が設定されたという視点を提示している。本稿ではこの視点に学び、島嶼に立てられた近世の村に「島村」という概念を与えることにしよう。「島村」の概念規定は次節第一項に譲る。



しかし、近世の二神村を「極貧の農村」とするイメージは、先に示した中世後期二神島の活力ある姿と、あまりにもかけ離れている。二神氏宗家の里帰りを「帰農」と表現することにも著しい違和感がある。町誌の記述の問題点は、周囲わずか一〇キロほどの島の百姓を農民と理解し、瀬戸内海の島の暮らしを水田農耕の物差しだけで評価しようとするところにある、といわねばならない。

そこで以下では、水田中心史観にとらわれず、しかし土地問題<sup>⑬</sup>も無視することなく、さらに中世史研究の成果も踏まえて、二神島に刻まれた海と島の物語をまずは虚心に紹介することにしよう。そのうえで「島村」ないし「島の近世」の意味を問いたいと思う。

## 二 瀬戸内海における「島村」の形成 ——島嶼に設定された近世の村

ここでは、近世における「島村」二神村の形成と、二神村における二神家（本島二神家）の立場、二神村ないし二神家の瀬戸内海地域における役割などについて検討する。

### （一）「海の領主」から「島村の庄屋」へ

まずは、二神氏宗家の「海の領主」から「島村の庄屋」への転身過程を、「豊田二神藤原氏子孫系図」「二神家末家之次第」「二神村新四郎由緒親類附」などの記載を頼りに、ごく簡単にたどっておくことにしよう。

### 〈史料3〉

#### （a）通種

羽柴太閤朝鮮国御征伐之節、属久留島越後守手、此時軍功在、彼家所記、仍朝鮮在国之節、従本国之書簡干今所持也

#### （b）家種

因河野通直公御家断絶、自ラ蟄居干二神島、干時嫡子種長被扶助予州大守加藤左馬助喜明公也、其後有喜明公国替移奥州会津故、引籠干本土之二神島、干時天正十五年

太閤秀吉公日本御検地之節、自戸田民部少輔殿依頼、伊予国風早郡島方マテ検地之案内、依テ戸田殿ヨリ之掟書有之（後略）

#### （c）種長

加藤嘉明公被扶助、此時先為鼻紙代二神島可給由之所、小知恥テ辞退、其後因嘉明公国替、又引籠干二神島（後略）

右の引用は、通範のあとの三代、通種・家種・種長にかんする「豊田藤原氏子孫系図次第」<sup>⑭</sup>の記述を抜粋したものである。二神家伝来の古文書などで裏付けが得られる範囲で、その記載内容を確認しておきたい（図1をあわせて参照のこと）。

すでに冒頭でも触れたが、二神通範の主君、河野通直が病没したのは天正一五年七月のことであった。四国平定の軍功で伊予大洲七万石を宛行われた戸田勝隆（？～一五九四）は、すぐさま領内の太閤検地を施行した。b部分によると、そのさい、風早郡島方の案内役を下命されたのが、通範の孫の家種であった。<sup>⑮</sup>河野氏正統が断絶するやいなや、彼は二神島に蟄居していたのである。家種こそ、近世二神家の初祖にあたる人物である。

しかしその一方で、a部分によると、家種の父の通種（通範の子）は、「久留島越後守」に属して文禄・慶長の役（一五九二～九八）に出征するなど、水軍の将として引き続き活動していたと伝えている。ただし、「久留島越後守」という人物について、また久留島家と二神氏宗家との関係については、詳らかにし得ない。<sup>⑯</sup>

さらにc部分の記載では、文禄三年（一五九四）、伊予に入封した松

前城主の加藤嘉明は、家種をその子息種長とともに「扶助」したという。「扶助」される身分がどのような立場なのか明らかではないが、士分格の取り扱いを受けたということであろうか。その後、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦、同八年の松前（正木）から勝山（松山）への城下町移転を挟んで、寛永四年（一六二七）、加藤家は蒲生家と入れ替わって会津若松へ転封になる。その翌年、父の家種は没し、子の種長は、主君嘉明の会津転封を機に二神島に再び「引籠」ったとされている。

二神氏宗家が「二神村」の庄屋として生きることになるのは、種長の跡、八右衛門種忠からである。「二神村新四郎由緒親類附控」<sup>24</sup>には、次のような記述がみられる。

〈史料4〉

二神藤左衛門種長嫡子

二神村

庄屋役初代

八右衛門

一 正保年中、居村庄屋役被仰付

一 寛文年中嫡子源三郎<sup>江</sup>居村庄屋役被仰付、饒村庄屋役被仰付、二

男嘉右衛門召連同村<sup>江</sup>引越、其後嘉右衛門<sup>江</sup>引替被仰付候ニ付罷  
帰ル

「庄屋役初代」とされる種忠が、居村庄屋役を仰せ付けられたのは正保年中（一六四四〜四八）のことだという。二神家文書では、寛文二年（一六六二）六月付の覚にみられる「二神村庄や 四郎兵衛」こと種次（種忠の子）が、二神村庄屋の最も古い事例である。<sup>25</sup> 同文書にみえる組頭勘右衛門もまた、「二神氏末家」とされる家柄である。<sup>26</sup>

ここまでの論点を整理しておこう。河野氏が健在であった時期の二神氏宗家は、風早郡二神島を本貫とする「海の領主」として活動し、伊予

本土の風早郡にも所領を有していた。豊臣秀吉による四国平定後に入封した戸田勝隆は、島方にも太閤検地を施行し、二神家種も案内役としてこれに協力した。この検地によって、二神氏が領有してきた二神島を中核とするいくつかの島々が、「二神村」という行政単位として把握され、近世大名の支配下に入ることとなった。関ヶ原合戦を経て江戸開幕以降は加藤嘉明が入封し、二神村は松山藩の支配するところとなった。それからしばらくの間、二神氏宗家は「兵」「農」未分離の立場にあったようだが<sup>27</sup>、寛永四年（一六二七）、嘉明が転封し、かわって蒲生忠知が入封してきた寛永・正保年中、家種・種長親子はふたたび二神島に「引籠」っている。彼らはこのとき、大名さえも鉢植えながら領地替えされる、近世という時代の現実に触れたに違いない。種長の子種忠以降、二神氏宗家は、二神村の庄屋役の家筋として落ち着いていくことになる。また、庄屋役はもとより村役人の主要ポストには、勘右衛門をはじめ二神一族の者が多く就任したものと思われる。こうして二神島と本島二神家（二神家）の近世は本格的に幕を開けた。

なお、本稿では、島嶼に設定された近世村を「島村」と称した。一島から数島を単位に形成された村が厳密な意味（狭義）での「島村」で、二神村などがその典型である。また、忽那島（現・中島）のような大きな島では、一島の内に複数の村が設定された。そのような場合は、広い意味（広義）での「島村」と理解しておきたい。松山藩では、これらの島嶼の村々を「島方」として把握していた。

ここでは、さしあたり狭い意味での「島村」の事例として二神島を取り上げるわけだが、今後は、広狭それぞれの具体像を解明し、島嶼に近世の村が設定されたことの意義を、近世史はもとより近現代史まで視野に入れて検討することが必要であろう。



図3 二神村の海域支配

## (二) 文政一三年の船改めと二神村の海域支配

二神家文書のなかに、文政一三年（天保元、一八三〇）九月付の「寅歳風早島二神村現船改帳」という史料が残されている。<sup>24</sup> 二神村に船籍を有する船の船主、帆の大きさや積載石数、用途などが書きとめられた調査書である。

この帳面によれば、長左衛門が所有する活船「永徳丸」(九反帆、五三石積、八端船、橋船付)、武平が所有する活船「永君丸」(九反帆、五五石、八端船、橋船付)のほか、弥右衛門らが所有する六反帆、およそ二〇石積くらいの三枚帆の船が五艘、さらに太兵衛らが所有する四三艘の端船(橋船)が書き上げられている。この時期の二神村には、登録だけでも五〇艘の船があったことがわかる。

「活船」とは「生け船」で、魚類を活かしたまま廻漕する「生簀船」のことと思われる。この船は比較的大きく、端船が付属している。鮮魚を大坂などへ運んだものであろう。二神村の百姓の生業の一端が垣間見える。

端船は橋船とも書き、「はしけ船」とも言う。本船に対する小回り船をさす言葉である。大型船の積み込みや積み下ろし、陸地との連絡用に使われる。百姓たちは、島々を結ぶ交通手段として、何種類かの船を現代の自家用車のように使用していたに違いない。

こうしたクルマ社会ならぬフネ社会とも呼ぶべき状況が、近世後期になって突如出現したとは考えにくい。二神島の人々が、中世以来、海を

舞台に多様な活動を展開してきたことを考えるならば、船は古くから生活の中に根付いていたとみるのが自然だろう。船の数とあわせて、行政村たる二神村の領域が、二神島のみならず由利島・小市島・中島・鴨脊島などの無人島を含んでいた点にも注目しておきたい(図3)。<sup>25</sup> 忽那諸島の近世村のなかで二神村は、最大級の海域支配を実現していたのである。

## (三) 瀬戸内海交通における二神村浦の位置

近世の二神村浦は、瀬戸内海交通の中継港としても機能していた。

天正一五年（一五八七）五月、豊臣秀吉は四国につづき九州も平定した。豊臣軍に最後まで抵抗して降伏した九州の雄、島津義弘（一五三五～一六一九）は、翌年の五月、秀吉に謁するため大坂にのぼっている。

義弘一行の上坂航路は図4に示したとおりで、二神島や由利島の近海を航行していたことがわかる。島津忠恒宛の義弘書状を抜粋した(史料5)<sup>26</sup>には、そのときの一行の様子が活写されている。

### 〈史料5〉

去月〔五月〕廿六其許罷立、打続風雨に、此方彼方ニやすらひ、漸晦日佐土原（現宮崎市）まで越着今月三日從徳之口出船、折しも神なりさハき、雨風打しきりたる、船中いかなる事もやらんと心遣せし（中略）十四日塩をまちて、豊後渡をわたし、さた崎とて、又塩あひあらし浪まを分過るほと、半道とおほゆ、其日の亥刻ニ伊与のうちふたまと、云る所に船かゝりして（中略）〔六月〕十五日未之刻ニ舟出し、遊る島と云る所にしほとき作りてやすらひけるに、そこなる神社を矢たての神といへり、此程順風ハなきに、しほ時つくりて船ちいつく共なきに、神のやらく事もや有なんとす、めけれハ、永純、あつき弓いるよりはやく行舟や矢たちの神のめく



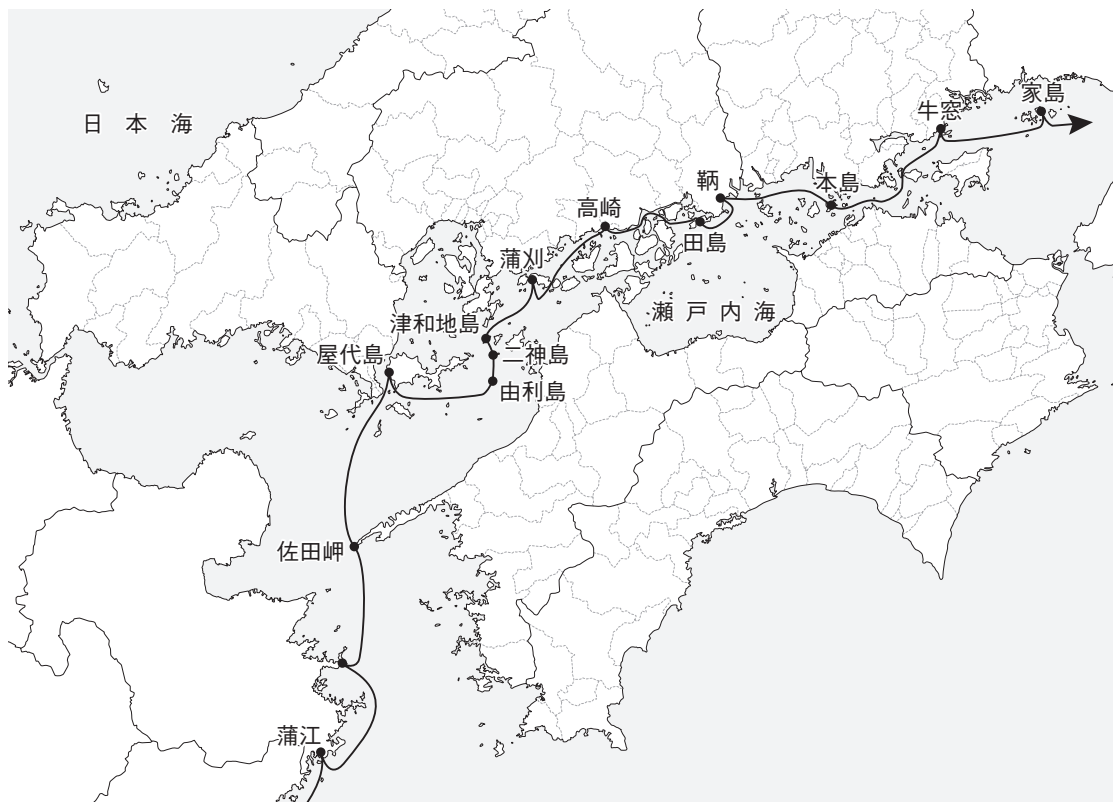


図4 天正16年 島津義弘上坂航路（典拠：『島津家文書之三』1493）

ミなるらん、それより順風時の間に吹立て、神のしるしを眼前に見  
侍りて、二神の島をとるに、茶屋宗次郎かこ島打立之名残なとい  
ひ出、追風にのほりくたりの舟のうへいの祈や二神の島、とよミ  
て、返しせよ、とせちにいひしかハ、予、舟ミ地の登りくたりにお  
もふ人二神の島にいのりやすらん、永純、島くを明て見せたけり玉  
くしけふた神の海乃四方の波間に、さてつわ路と云る所をとるニ  
（中略）廿三日夜をかけ堺之津へ着船（攻略）

一行が鹿児島を出立したのは五月二六日のことであった。折からの風  
雨に陸路・海路ともにはばまれ、由利島付近にたどり着いたのは、よう  
やく六月一五日のことであった。乗船の面々は「遊る島」（由利島）の  
「矢たての神」（矢立大明神）の神威に感じ、「二神の島」に祈り、その  
心情を歌に詠みあって楽しんでゐる。この船旅は、海賊停止令の発布直  
前のことだが、義弘らに緊張感はうかがえない。中国・四国・九州平定  
後のこの海上では、すでに「豊臣の平和」が実現していたのである。  
何はともあれ、九州から兵庫・大坂方面へ赴くには、防予諸島を通過し  
なければならず、二神島や由利島は古くからの経由地であったとみられ  
る。

さらに、江戸開府以降になると、いわゆる「鎖国」政策がとられると  
ともに、東廻り海運や西廻り海運が整備されるなど、列島中心の海上交  
通網が完成する。統一政権の覇権によって安全が約束されたその交通網  
のなかに、瀬戸内海交通もはっきりと組み込まれていった。

二神家文書をひもとくと、薩摩藩の参勤交代の一行、あるいは下向途  
中の豊後日出藩木下大和守俊泰の一行、さらに次項で紹介する日本海  
側・九州方面からの御城米船などが、二神村浦に「仮停泊」していたこ  
となどが判明する。さらにまた、津和地島浦に着目した鴨頭俊宏氏の研  
究によれば、二神村浦が朝鮮通信使や幕府巡見使の経由地になっていた

津和地島は二神島の北隣りに位置する島で、その浦には参勤交代の大名をはじめ公用・通行者のための宿泊・休憩施設である「御茶屋」が設けられていた。そして、注目すべきことに、二神村の庄屋であった二神新四郎種章（寛政六＝一七九四年没）は、津和地村の「預庄屋」や「御用船通船御用掛」などを勤めていた。<sup>20</sup>

以上のような事実からは、近世の瀬戸内海交通に占める二神村浦の重要性と、一村の庄屋にとどまらない二神家の役割の大きさをうかがうことが出来るだろう。

(四) 御城米船改め

御城米とは幕府直轄領から江戸や大坂へ送られる年貢米のことであり、御城米船はその廻送をになう御用船である。御城米船の上坂航路を示した図5によれば、二神島が出羽酒田・豊前―大坂間を就航する御城米船の寄港地であったことがわかる。二神村庄屋二神家は「御城米改役」も勤め、寄港した御城米船を検査していた。〈史料6〉<sup>(30)</sup>によって、その業務内容を具体的に知ることができる。

史料 6

覺

一安芸国竹原浦庄右衛門船六人乗、今度豊前国宇佐郡岡田庄太夫様御代官所大坂廻子歳御城米五百五拾四俵、同国中須賀浦<sub>ニ</sub>而船積被仰付、丑四月三日、彼地出船仕、同九日午刻、松平隠岐守様御知行所風早郡二神村浦<sub>江</sub>船繫仕候<sub>ニ</sub>付、船足御極印并船頭・水主人数御改請申候所、送状之通相違無御座候<sub>ニ</sub>付、同十一日辰刻、出船仕所実正<sub>ニ</sub>御座候、以上

安芸国竹原浦直乗船頭

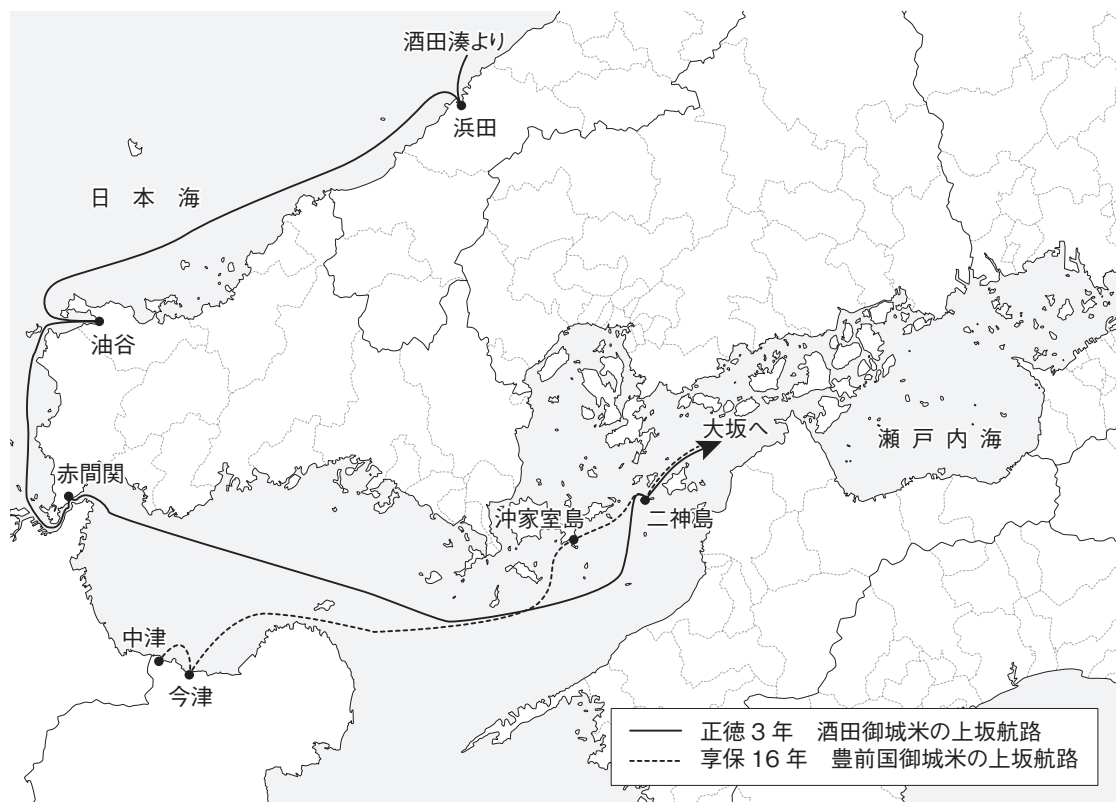


図5 御城米船上坂航路（典拠：二神司朗家文書 第一次24「御城米船諸写控」）

延享二丑年四月十一日

庄右衛門<sup>㊦</sup>

豊前国宇佐郡別符村上乗

次兵衛<sup>㊦</sup>

予州松山御領風早郡二神村庄屋

新四郎殿

右の史料は、延享二年（一七四五）四月一日、安芸国竹原浦庄右衛門と豊前国宇佐郡別符村次兵衛が、二神村庄屋新四郎（種章）へ差し出した「覚」である。これによると、六人乗り船の直乗船頭庄右衛門は、豊前国宇佐郡岡田庄太夫俊惟代官所の子年（延享元年）御城米五五四俵の大坂廻米を請け負っていた。庄右衛門船は、この年の四月三日、監視役に当たる上乘の次兵衛を同乗させて豊前国中須賀浦を出立、同九日昼時、二神村浦へ船繋ぎした。二神村の庄屋新四郎は、庄右衛門船の船足極印、船頭・水主の人数などを改め、送状の内容と照合したうえで、一日に出船することを認めている。

船足極印というのは、廻船の過積載規制のため、船側に押した焼印のことをいう。通常は、五〇六寸四方の焼印入りの木札を、腰当船梁の真下から吃水線との間に打ちつけ、船足の限界を標示していた。<sup>㉑</sup>御城米船の場合、海難事故や盗難・紛失などを回避するために、日和待ちの浦々でも、御城米俵数・船頭・水主員数・上乗人名などを記した送状の提示が義務付けられ、とくに嚴重な船改めが行われていた。

庄屋新四郎による船改めをクリアし、四月一日に二神村浦を出船した庄右衛門船であったが、実はこの船改めに関連して、〈史料6〉の「覚」とは別の文書が、もう一通残されていた。それが次の〈史料7〉である。

〈史料7〉

一札之事

一安芸国竹原浦庄右衛門船直乗船頭・水主共六人乗、今度豊前国宇佐郡去子歳御城米五百五拾四俵、同國中須賀浦<sup>ニ</sup>而積之、船足御極印御改請、当四月三日、彼地出船仕、同九日、御当地江船繋仕候<sup>ニ</sup>付、日帳差出御断申候得者、船足御改被成候所、御極印御掟之通より船足入申<sup>ニ</sup>付、御送状<sup>ニ</sup>相違仕由<sup>ニ</sup>而、段々御吟味被成候得共、外荷少茂積合不申候、小船故荷足少々入申候、此後何方<sup>ニ</sup>而御改請六ヶ敷御座候共、御当地御難<sup>ニ</sup>者掛不申、私共申披可仕候、為後日如件

安芸国竹原浦直乗船頭

延享二丑年四月十一日

庄右衛門<sup>㊦</sup>

豊前国宇佐郡別符村上乗

次兵衛<sup>㊦</sup>

予州松山御領風早郡二神村庄屋

新四郎殿

「一札之事」と題されたこの証文の日付・作成・宛名は、先の「覚」とまったく変わらない。宇佐郡御城米を積載した庄右衛門船が、九日に二神村浦に船繋ぎして改めを受けたという冒頭数行の内容も同じである。ところが、船改めの結果には問題があった。庄屋の新四郎が船足を改めたところ、送状に相違して、「御極印御掟之通」より船足が深く入り過ぎていたというのだ。直乗船頭の庄右衛門と上乘の次兵衛の二人は、新四郎の吟味にたいして、小船ゆえに荷足（荷物を積んだときの船底から吃水線までの深さ）が少々沈んでしまったが、御城米のほかの荷物は少しも積んでいないと申しひらきをしている。新四郎は、これが他の寄港地で摘発されたときのために、「御当地御難<sup>ニ</sup>者掛不申、私共申披可仕候」という一筆を取り、庄右衛門船の出船を黙認している。本文

書がその一筆である。

同様のケースは他にもあったかも知れない。庄屋新四郎は、御城米船寄港地の責任者として、航海の安全と経済効率を両立させるかのような柔軟な裁量を発揮していたのだろう。新四郎の御城米改役としての「裁量」にたいして、庄右衛門や次兵衛の側から何らかの見返りがあったかどうか、知る術はない。

こうしたエピソードもまた、瀬戸内海交通における二神村浦と二神家の役割を示す興味深い事例のひとつといえるだろう。

### 三 近世二神村の生業

「島村」二神村が設定されたあとの二神島では、どのような暮らしが営まれていたのだろうか。近世の生業は中世後期とまるで異なっていたのだろうか。中世からの連続面を視野に入れつつ、近世ならではの生業構造を探ることにしよう。

#### (一) 煎海鼠の請負

中世の二神島で「たわらこ」と呼ばれた海鼠が水揚げされていたことはすでに述べた。その後も海鼠の採集は継続されるのだが、「鎖国」政策がとられていた近世中期以降には、長崎での対清交易を背景として、加工した煎海鼠（海鼠を煮て干したもの）の需要がとくに高まっていく。

中世後期から近世前期までの対明・対清交易においては、いわゆる日本銅や日本銀を輸出して、中国産の生糸・絹織物・書籍のほか、ヨーロッパ産の綿織物・毛織物、南洋産の砂糖・蘇木・香木・獣角などを輸入していた。しかし、列島における鉱物資源の不足をうけて、江戸幕府は元禄一〇年（一六九七）に長崎会所を設立し、銅に代えて倭物三品（煎海鼠・干鮑・鱧鰯）を対清交易の支払いに充てるようにした。

長崎会所による倭物の集荷は、延享元年（一七四四）以来、請負商人

を通じて行われていたが、天明五年（一七八五）からは会所役人を生産地へ派遣する直買い方式へと転換した。しかし、それでも煎海鼠の集荷・買い付けは不振であったため、寛政十一年（一七九九）、勘定方の公儀役人「煎海鼠奉行」平岩右膳親庸が伊予諸藩の村々を廻り、煎海鼠販売を督励している。

興居島村堀内家文書を紹介した菅原憲二氏の作成した表によると、寛政一二年（文化一二年（一八〇〇）一五）の松山藩領では、公儀からの生産売上指定高である「御誂高」を二九か村で請け負っていた。このうち二神村の御誂高は五〇〇斤にのぼり、松山藩領内では和気郡岩城村の一三〇〇斤に次ぐ大口出荷であった。<sup>33</sup>

二神島の海鼠漁は、中世から近世、さらに近代へと続く伝統的な水産業であるが、近世においては、「鎖国」政策のもと長崎貿易の一環に組み込まれるという、他の時代にはない特質を帯びていた。

#### (二) 由利島の鰯網漁と他国の漁民

由利島は二神島の南約一二キロのところに浮かぶ周囲五キロほどの小島である。近世の記録には「油利島」とも「百合島」とも表記されている。

前出の二神種章が旧記をもとに作成した、安永七年（一七七八）の『百合島詠（録か）<sup>34</sup>』には、次のような言い伝えが記されている。

#### 〈史料8〉

（前略）但、俗ニ右島（由利島）今之大山の方を小百合ト言、今之小山の方を大百合ト言、又油利千軒トテ、往古ハ人家千軒有之候之由、至今ニテ申伝也、古大地震ニ崩タルヨシ（後略）

「往古」の由利島は「油利千軒」と呼ばれるほどの繁栄ぶりであった



が、いにしえの大地震で崩落・沈下し、今のような小島になったというのだ。由利島と二神氏とのかかわりは中世にさかのぼるものと推測されるが、現在のところ中世文書ではその関係を確認できていない<sup>35)</sup>。

『百合島詠』が成立した安永年中、由利島に定住する者はほとんどいなかったものの、二神村の「付添いの小島」——属島として、その磯と山は「村方稼ぎ第一の場所」とされている。同じく種章が整理した『油利島』<sup>36)</sup>という、由利島関連文書の書写記録には、「古来より居り来ル」鰯網の記述がみられ、由利島における「村方稼ぎ」の一端が示されている。

由利島における鰯網は、紀州塩津村の者が引いたのが始まりであった。その時期は特定できないが、近世のごく早いころの話と思われる。

二神村の者もこの先進的な紀州網を見習っており、それが後の「源三郎（二神種次）網」に繋がっているという。

その後、由利島の鰯網引きはいったん「中絶」したが、いつのころか塩津村の者が再訪し、鰯網を改めて希望したので、「八右衛門（二神種忠）網」の名目で操業させ、松山藩に運上銀を上納させた。この八右衛門網は、さらに寛永一〇年（一六三三）から正保元年（一六四四）にかけて、播州福留浦十兵衛が引いている。以来、由利島には各地の漁民たちが訪れては、鰯網の操業を申し入れるようになった。ちなみに、八右衛門網を始めた二神種忠（貞享五〇元禄元、一六八八年没）は、すでに紹介したとおり、父の種長まで続いた武士意識を払拭し、正保年中に二神村の庄屋役を初めて勤めた人物である。

種忠の嫡子の二神種次による源三郎網からは、たびたび「寄合網」という操業形態をとっている。正保二年の塩津村勘兵衛を皮切りに、寛文六年（一六六六）には伊予国和気郡岩城村孫右衛門が「一年切」に借用し、同九年には次のような「網議定」が取り交わされている。

# 〈史料9〉

## 網議定

一 網入目何程入申候共、太兵衛出シ可申事

一 鰯何程引ケ申候共、太兵衛買取可申事

但シ、干鰯之直段ハ以相談相究可申事

一 網入目ヲ払利銀有之時ハ、其利銀ヲ三ツニメ、壹ツ宛長師五右衛門・二神源三郎・瀬戸町太兵衛、右三人メ同様ニ割符仕取可申事  
一 網ニ若損銀在之時ハ、三人之者以相談ヲ網売払可申候、其上ニ而も損銀有之時ハ、右三人メ割符仕払可申事

右者伊予国二神島之内油利島之鰯網代之網、右三人之者共以相談ヲ如此相極候所実正也、然上ハ此儀定之通少も相違申間敷、為後日連判如件

寛文九年卯月十一日

伊予之国長師

杉野五右衛門

同

二神源三郎

安芸国隠戸瀬戸町  
加藤太兵衛

この「網議定」は、寛文九年一月、長師村杉野五右衛門、安芸国音戸瀬戸町加藤太兵衛、そして二神源三郎との間で結ばれた寄合網にかんする取り決めである。二神源三郎（種次）は、いうまでもなく二神村庄屋であり、由利島の進退権を掌握していた。二神島にほど近い忽那島（中島）に所在した長師村の杉野五右衛門は、島方の大庄屋を勤める家柄で、近在の有力者であった。また、議定の内容からみて、音戸瀬戸町の加藤太兵衛は、このたびの寄合網の出資者である。

「網議定」によれば、鰯網入費は太兵衛が全額負担するが（第一条）、

そのかわり太兵衛は、水揚げ高にかかわらず干鰯を買い取る権利を得ている(第二条)。網の引手にかんする取り決めはとくにないが、三年前の寛文六年六月、前述の通り、岩城村庄屋孫右衛門と同村宗右衛門が、由利島網代の一年切り請合証文を差し出しているから、岩城村の漁師たちが実際の鰯網漁を担っていた可能性はある。なお、鰯網代の利銀は三者で均等に配当し(第三条)、損銀が生じたさいには、三者で相談のうえ、網の売却や損益の分担などを決めることにしている(第四条)。この「網議定」がいつまで有効だったのか定かではないが、由利島における寄合網操業の一端を伝える興味深い史料といえよう。

その後、明和七年(一七七〇)には、種次の曾孫の新四郎種章が、讃岐国息吹島庄屋網を雇い入れた事例などもあるが、二神村は網代希望者のすべてを受け入れていたわけではない。時期や状況、希望する相手によって対応を変えていたのである。

たとえば、寛文二年の伊予国和氣郡荏屋村からの申し入れは、「村網障りに相成り候」という理由で断っている。このときは、島代官石田次郎右衛門の裁許にかかり、いったんは両村の入会として、網引の順番や運上銀について取り決めている。<sup>(38)</sup> 寛文四年には、ある「牢人」が網引きを希望したが、島代官石田が難色を示したため立ち消えとなっている。近世後期になっても、文政五年(一八二二)に備中白石島佐五右衛門らとの間に「由利島網さしもつれ一件」が発生している。<sup>(39)</sup>

そのほかの注目すべき事件としては、伊予郡松前浜村との争論がある。元禄一六年(一七〇三)、松前浜村庄屋覚右衛門らが、由利島を自村の猟場にすべく、代官所に出願したのである。二神村庄屋に就任したばかりの二神種次は、これを完全に拒絶し、代官谷崎善助らもその意向を尊重した。さらに覚右衛門は、種次の嫡子種永の代の享保三年(一七一八)にも、「押して油利島へ入り込」む騒動を引き起こす。しかし、翌年の裁許で松前浜村は敗訴し、結果的に二神村の由利島権益が認定さ

れている。なお、この松前浜村の漁師は、中世の「職人」的な海民の系譜に属する人々と推察され、近世にいたっても「漁業勝手たるべし」という、広域的な自由漁撈特権を主張していた。この点については、項を改めて説明したい。

以上のように、由利島の鰯網は、紀州塩津村の者から「見習」って、本格的には近世初期から前期にかけてスタートした新たな生業であった。その網は二神村の者が自ら引くこともあったが、多くの場合は他所からの出漁者に委託したり、「寄合網」として操業された。また、由利島は絶好の鰯猟場だったため、たびたび魚場争いの舞台にもなってきたのである。

なお、由利島での鰯網が紀州網に由来することに関連して、和氣郡岩城村や同郡荏屋村の漁師が網代を希望していたことも注目される。なぜならば、それらの村々には、船を家として海上生活を営む漂泊漁民——家船の拠点たる安芸国能地の枝村があったからである。そして、能地漁民をはじめとする瀬戸内海の家船の親村もまた紀州にあった。<sup>(40)</sup>

古三津の真隆山儀光寺(現松山市、真義真言宗)に残された明治三〇年「当山明細帳」という記録には、次のような「由緒」が伝えられている。

#### 〈史料10〉

一由緒 当寺ハ天平年中、儀光上人、予州由里島へ、行基菩薩之御作ナル御丈四尺一寸ノ十一面觀世音ヲ負ヒ来リ、一ノ草菴ヲ仮リニ構ヘ(中略)寺号ヲ儀光寺ト称ス、后大伽藍トナル、然ルニ、屢々海嘯等ノ天災遭ヒ、由里千軒ノ在処モ流失ス、天災ノ屢々ナルヲ恐レ、弘安年中、本尊及釈迦如来・阿弥陀如来、仁王門等ヲ当地ニ奉転ス、庄屋(之ノ字不羊(詳))良左衛門・組頭北野某始メ老若男女、本尊エ供奉シテ来、霊地ヲ尋ネ、以テ弘安年中是

ノ地ニ再建ス、供奉者傍ラ空地ニ住居ス、后漁業ノ便ニ依リ、西方数町ノ茅原アリ、茅ヲ刈リ茅屋ヲ築キ、漸々一村落トナル、之レヲ伝知センカ為メ〈之ノ字不羊〉（詳）ヲ刈屋村ト云、前キノ空地ヲ畑トシ、名ヲ刈屋〈之ノ字不羊〉（詳）ト云

住僧 沙門某

この寺伝によれば、天平年中（七二九～七四九）に儀光上人が行基作の十一面観音像を背負って由利島に庵を結んだのがこの寺院の創建で、弘安年中（一二七八～一二八八）の地震・津波を機に現在地に移転したのだという。ともに避難した島民たちは、漁業に適した刈屋（三津浜の神田町・住吉町付近）、新蒔屋（高浜付近）に移住したとも言伝えている。家船が朝市を開いたことで知られる三津浜―蒔屋村と、ごく至近の古三津に移転した儀光寺、そして由利島ひいては「由里千軒」とを結び付ける、きわめて興味深い伝承といえる。

由利島は小島とはいえ、海と山の産物に恵まれた経済的価値の高い島であり、豊後と伊予とを結ぶ海上交通の拠点に位置した。それだけにこの島は、二神村の宗門人別帳に登録された近世的な百姓たちはもとより、漂泊性の高い家船系の漁民や中世の「職人」的漁民の系譜をひく漁民たちが集まり、交差する場となっていたのである。

しかしながら、上述の事例をみるかぎり、近世の二神村が漂泊漁民を排除する傾向にあったことも窺えよう。詳しくは後で述べるが、そのせめぎ合いの様相に、近世という時代の特質が鮮やかに投影されている。

### （三）由利島石の採掘

近世後期の二神英左衛門種式（慶応三〇一八六七年没）の時代には、由利島で産出した「油利島石」（以下、由利島石）にかかわる史料が少なからず見出される。〈史料11〉はその一例である。

#### 〈史料11〉

一 石拾壹艘 二神村  
但、切符拾壹枚 村方油利島石

伊予郡西垣生村沖新田  
土手囲并唐樋築直し御普請ニ付相渡

右之通、積取ニ相成申候、以上

亥六月

幕末の亥年、二神英左衛門は、津和地島に滞在していた御普請方元締の渡部重右衛門から、伊予郡西垣生村沖新田のために伐り出した石材の量を尋ねる六月一日付書状を受け取った。<sup>④</sup>右の史料は、その問い合わせにたいする返答書の控えである。由利島石と命名された石材が、沖新田の集落を洪水から守る土手囲（囲い土手）、あるいは河口市部に築かれたとみられる高度な排水設備である唐樋の材料として活用されていたことがわかる。

由利島石は、西垣生村沖新田御普請のほかにも、「郡方御普請入用石」として三津浜御船場御普請、郡方川筋急難御普請などで使用された事例がある。<sup>⑤</sup>そして、由利島石の搬出のために、「石船」と称される船が、由利島と伊予本土の御普請場との間を頻繁に往来していたことも確認できる。<sup>⑥</sup>

ちなみに、由利島の西の「大由利」は安山岩でできている。大成経凡氏は、中世から近世初頭の忽那諸島の一石五輪塔や家型石廟の材質が安山岩であることを報告している。<sup>⑦</sup>そのなかには由利島石で造られたものも少なくないのかも知れない。

#### (四) 材木の伐りだし

〈史料12〉<sup>④8</sup>は、二神村庄屋の源三郎（種次）が長野源右衛門宛てに認めた未年七月二日付の書付である。

〈史料12〉

積渡シ申「」

「」四本「」柱

一 四本 長□（式力）間 檣木

一 式本 長式間 □木

一 三本 長三間 引物

一 拾壺丁 長壺間 板木

木数ノ式拾四本

右之通積渡シ申候間、請取可被下候、以上

未ノ 二神村庄や

七月二日 源三郎

長野源右衛門様

この書付は、年末詳のうえに破損などのために判読しきれない部分もあるが、二神源三郎（種次、享保一〇〇＝一七二五年没）が、さまざまに加工した木数ノ二四本を船で積み出し、長野に送っていたことを伝えている。

中世に二神氏が得居通幸へ船の用材一〇〇本を調達したことは前述したが、材木の伐り出しや製材は、近世になっても続けられていたのである。

以上の事実から明らかなように、近世の二神島や二神村の現実、これまでの思い込みに反して、「極貧の農村」のイメージとは程遠いもの

といわねばならない。二神家と二神村の百姓は、有人・無人の複数の島領有を根拠とする広域の海域支配を維持することで、海と島の暮らしを継続、発展させていた。

二神島はもとより忽那諸島全体の近世史像を理解するためにも、中世から近世への連続面と断絶面、そして変容の局面を正しく把握していく必要がある。

#### 四 松山藩と二神村

二神島とその周辺海域の小島は、太閤検地を機に村切りされ、二神村という近世の村に編成された。中世には海の領主として同地域に君臨した二神氏宗家であったが、近世には大名が知行する島村の庄屋に落ち着いていった。こうして二神村は松山藩領となったわけだが、二神村と藩との間にはさまざまな利害関係の対立があった。

##### (一) 由利島「肥草山」化計画

ここでは前出の『油利島』<sup>④9</sup>やそのほかの史料を参考に、由利島の帰属をめぐる、二神村・二神家と松山藩との駆け引きに着目してみたい。

松山藩が由利島に初めてその食指を動かしたのは、明暦二年（一六五六）のことであった。由利島を伊予郡の「肥草入付山」ならびに「網代漁場」にするという、島方代官柳瀬勘兵衛からの申し付けがあったのである。柳瀬の打診は伊予郡からの出願を受けたもので、その背景には松山藩、とりわけ郡方役所の意向が見え隠れする。だが二神村側は、由利島は「百姓ども第一の稼ぎ場所」であるとして撥ねつけ、柳瀬もまた「先規の通り何らの故障なし」と聞き入れたという。島方代官らしく島寄りの判断をしたものといえよう。

ところが元文六年（寛保元、一七四一）二月には、郡奉行の穂坂太郎左衛門が、由利島を十年間、伊予郡の肥草山にすると申し渡してきた。



このたびの申し渡しは郡方直々のものであり、由利島を草山や柴山にして、松山藩領伊予郡の田地を養う刈敷の一大供給源にしようというねらいであった。

実はこの少し前、西日本全域を襲った享保の飢饉が、松山藩領に全国でも最悪の被害をもたらしていた。体面を失った松山藩は、年貢・諸役を増徴や新田開発などを強引に推進し、なりふりかまわぬ財政再建策を断行した。その結果、同年八月には、久万山二六か村のうち二五か村の百姓約二八〇〇人が大洲藩領へ逃散してしまいう前代未聞の大失態を招いた。いわゆる「久万山農民一揆」である。<sup>⑤</sup> 由利島の肥草山化計画は、藩のそうした政策の一環をなすものにほかならなかった。

十年間という期限付きとはいえ、いったん肥草山にしてしまえば、由利島の林相は一変し、木材や石材の伐り出しはもとより、漁業やその他の水産業に影響をおよぼすことは避けられないだろう。庄屋の新四郎(二神種永)と組頭の忠蔵・四郎右衛門は、由利島は「磯山とも村方稼ぎ方第一の場所」であるとして、召し上げを断固拒否した。穂坂を筆頭とする郡方は、同年二月、由利島を断念せざるを得なかった。

しかし、二七年後の明和五年(一七六八)正月、松山藩は由利島の収公計画をみたび実行した。しかも今回の計画は念入りで、島方大庄屋の畑里村濱田政右衛門のほか、改庄屋の長師村五右衛門・宮野村半左衛門らを動員して、周囲からも揺さぶりをかけている。年始礼に松山へ出てきた庄屋新四郎は、島方大庄屋の畑里村浜田政右衛門から呼び出され、<sup>⑥</sup> 思いもよらない話を聞かされた。

#### 〈史料13〉

二神村之内油利島之儀、此度御上莫太之御利益有之候ニ付、御上江被召上ケ候、押付御月番御代官迄被仰付候間、其節庄屋新四郎儀、神妙ニ御請仕候様、大庄屋迄内意申可置旨、御奉行稲川八右衛

#### 門様へ被仰付候(後略)

話の発端は前年極月二八日のこと。大庄屋政右衛門は郡奉行手代岡宮九助から急な呼び出しを受けた。岡宮は、元々藤井与兵衛も同席させ、政右衛門に郡奉行稲川八右衛門の内意を申し渡した。郡奉行は、「御上、莫太の御利益」となる由利島の召し上げを決めており、ほどなく月番奉行から島方代官へ正式に申し渡されることになる。ついては、そのさいに二神村庄屋新四郎(二神種章)が「神妙にお請け」するよう、お前からあらかじめ説得しておけ、というのだ。

大庄屋政右衛門は、新四郎にその内意を次のように伝えている。

#### 〈史料14〉

右ニ付、大庄屋へ申上候者、右島(由利島)之儀ハ先年も伊与郡江被遣度之由被仰付候へ共、村方持第一之場所ニ而御座候故意味申上候処、御聞届之上前体ニ被仰付候(中略)成程、先年之意味書委細御奉行所ニも有之候へ共、此度之儀者右様之意味ニハ一切御かまひ不被成、此度油利島之儀者御上式千俵余之御売筋有之候得共、二神島へいか様ニ申出候而も、八拾石余之二神島ニ地郡・大郡之莫大御益ニ相成候筋ニハ御かへ不被遊之旨、御奉行中被仰聞候へハ、彼是御請及異儀候ハ、人痛等出来可申候ニ付、表達而被仰付無之内ニ大庄屋迄内意申置候様ニ、猶又右表達而申付候ハ、新四郎驚可申ニ付、旁以大庄屋迄内意申聞、新四郎江得心為致置候様ニと御奉行中へ被仰聞候(後略)

政右衛門がまっさきに口にしたのは自己弁明であった。由利島収公計画を聞かされた政右衛門は、伊予郡の肥草山化計画の先例を引き合いに出して、同島が二神村の「村方稼ぎ第一の場所」と認定されたことを進

言したという。島方大庄屋として、まずはともかく二神村の村益を擁護した、というわけである。ところが、その進言にたいする岡宮の返答は次のようなものであった。

「なるほど、先年の詳しい『意味書』は奉行所にもある。しかし、このたびの計画の前に、一村の村益など一切関係ない。『地郡・大郡』の莫大の御利益となる筋を、村高八〇石余りの二神村の利益に替えるわけにはいかないのだ」

先例を承知で強行しようとしている計画だからこそ、庄屋新四郎が「かれのこれと異議を唱えて承諾しないならば、『人痛み』などもでるだろう」という、脅迫まがいの発言も飛び出したのである。さらに岡宮は、「表だって公表する前に、大庄屋であるお前が新四郎を得心させておけ。それがお奉行のお気持ちだ」と畳みかけて、政右衛門にプレッシャーをかけてきたというのだ。

内意を聞いた新四郎は、「何分にも私の一了簡にて畏み奉り候と御請けは得仕らず候」と、村人との協議の必要性を訴えて即答を回避した。そのうえで、正月九日付口上書をはじめ数通の歎願書を認め、由利島の海と山は二神村で暮らす四五〇人ないし五〇〇人の生命線であり、これまでの出入の裁許においても、由利島は二神村「専要の場所」と認められてきたと、従来通りの主張を繰り返した。このあたりの対処の仕方、いかにも近世的なものといえよう。新四郎種章は、島に君臨した中世の「海の領主」ではなく、百姓の代表である近世の「島村の庄屋」として振る舞ったのである。領主ではなく村人の代表であればこそ、村益を主張し、自分一人の判断で計画を受け入れられない、という抵抗の仕方が可能であった。

ところが、正月一〇日、元々藤井の指示を受けた大庄屋と改庄屋らは、これらの口上書を奉行所には取り次がず、「大益」を顧慮せず「村方ばかり」の「意味がましき儀」を申し立てるのは不届きだという苦言

を重ねて伝え、このままでは「人痛み」が出る危険もあると、かえって新四郎を説得しようとしたのだ。しかし、それでも新四郎は引き下がない。

#### 〈史料15〉

右ニ付新四郎申候者、此度之儀、私忝人ハいか体之難涉ニ被仰付候而も不苦候、如此申上候上者、命を惜ム心底毛頭無御座候間、何卒々々右口上書御指出被下、由利島之儀、前体ニ相成候様ニ御執成被成下候者、五百人之為御座候間、此段今一応御元ノ様ニも被仰上被下候様ニと申候

「このたびのことで、私一人はどのような困苦に仰せ付けられてもかまいません。こう申し上げる以上は、命を惜む心底は毛頭ございません。なにとぞなにとぞ口上書を提出していただき、由利島を前々どおりにおとりなしくだされば、二神村の五〇〇人のためになりますので、このこと今一度、御元ノ様にも仰せ上げてくださいますよう」

そう言って新四郎は、反対に大庄屋らに迫ったのである。このような厳しい交渉は二か月にも及んだ。その結果、二神村と松山藩郡方との間では、次のような取り決めに締結することとなった。

#### 〈史料16〉

風早島二神村へ

一由利島下草之儀、先達而内々申聞候処、無違背奉畏候段、神妙之至ニ候、依之右下草伊与郡へ御田地蒔敷ニ被仰付候間、弥以其旨可相心得事

(但書省略)

一右ニ付、二神村之者共、筈持相減可令難儀ニ付、為御救左之通被

下置候間、永ク渡世之役ニ致、一同無難ニ取続可申事

一米四百五拾俵 被下之

但、当子才分寅歳迄三ヶ年ニ相渡ス

ノ

一右島之儀、土地者其儘二神村持分之事ニ候間、諸注進、其外磯持等之儀者、当時迄之通可相心得事

右之通可被申渡候

子二月

すなわち、取り決めの要点は、①下草は伊予郡御田地の刈敷に差し出す(一条目)、②二神村は「苦稼ぎ」減少分として米四五〇俵を三か年間受け取る(二・三条目)、③由利島は「そのまま二神村持ち分」と認め磯稼ぎなどは現状通り(四条目)、というものである。伊予郡への下草供出と引き換えに、二神村による由利島の領有は維持されたのである。「海の領主」の末裔、新四郎は、命がけの主張を貫くことで、「島村の庄屋」としての意気地をみせたといえよう。

以上のような由利島をめぐる松山藩と二神村・二神家の駆け引きに、網野氏は「農業の論理」と「海と山の論理」の対抗を看取り、後者が前者に負けずに貫徹された希有なケースであると指摘している。<sup>(52)</sup>

## (二) 松前浜漁師の由利島進出

「農業の論理」と「海と山の論理」の対抗の事例は、ほかにも容易に見出すことができる。たとえば、先に触れた伊予郡松前浜村の由利島進出は、一見、海と海との対立のように思えるが、その本質は松山藩による「農業の論理」の全面展開にある。この問題を理解するためには、中世まで話をさかのぼらねばならない。

中世の松前には石清水八幡宮の玉生荘があり、一五世紀後半には「松

前浦衆中」の存在が確認できる。網野氏は、松前浜の住人は八幡宮に奉仕する神人、「職人」的海民であり、近世の松前浜村漁師の広域的な自由漁撈特権を主張する起源はここにあると推測している。<sup>(53)</sup> また、歴史地理学の立場にたつ富田泰弘氏は、中世の松前は旧伊予川(重信川)河口のラグーンを利用した天然の良港で、織豊期以前から集落を形成した中予地方随一の港町であったと指摘している。<sup>(54)</sup>

文禄の役の戦功で伊予に六万石を加増された加藤嘉明は、文禄四年(一五九五)、松前城(正木城)に入った。松前城を居城に選んだ嘉明の意図は、海上交通の便と水軍力の充実にあったと思われるが、慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦いの終結と戦功による加増を機に、道後平野中央部にそびえる勝山に新城を築き、その麓に新たに城下町を建設することにした。

大石慎三郎氏は、松前が放棄された理由として、直接海に面している「風波」が荒く城が破損しやすいこと、また絶えず伊予川が氾濫して城下町に被害がおよんだことをあげている。<sup>(55)</sup> そのほかにも、関ヶ原の戦いによって徳川家康の覇権が決し、軍事的理由で城地を選定する意義が低下したこと、文禄五年(一五九六、慶長に改元)の慶長伊予地震に連動して中央構造線上の活断層帯で地震・津波が頻発したことも、考慮しておく必要があるだろう。

新城下選ばれた土地は、いうまでもなく現在の松山市の中心部であるが、ここもまた当時は湯山川の氾濫原で、一雨ごとに流路が変わるような状態であった。そこで嘉明は、家臣の足立重信に命じて、暴れ川であった旧伊予川と旧湯山川の改修・治水工事と大規模な新田開発にあたらせ、あわせて松山城(勝山城)の築城と城下町の建設に取り掛かったのである。

この大土木工事においては、松前から伊予灘に注いでいた旧伊予川の河道が付け替えられ、松前の北方に河口を移して現在の重信川となっ

た。また、道後の石手寺門前から勝山にぶつかっていた旧湯山川は流路を南に押し曲げられ、余戸村鎌太（のちにここを「出合」と称する）で旧伊予川に合流させ、石手川と改称された。旧伊予川と旧湯山川の流れを合わせた重信川は、堅牢な堤防で固められ、水害を免れた土地は五〇〇〇余町歩におよんだといわれる。以後、大規模な新田開発が進められ、道後平野は伊予随一の広大な水田地帯に変貌していった。<sup>(56)</sup>

慶長八年（一六〇三）、築城なった松山城へ嘉明が移ると、松前は城下町の機能を失った。そのさい移住した商人・職人が、松山城下に新たに「松前町」を形成した。そして、その割りを食ったのが、あとに残された松前浜村であった。元禄一六年（一七〇三）に由利島進出を目論んだ、前述の漁師たちだったのである。次の〈史料17〉は、松前浜村庄屋覚右衛門らが認めた由利島出漁許可願いである。

#### 〈史料17〉

##### 奉願口上

一伊与郡浜村庄師男女千人余御座候処、浦方獵場重信川下ニ御座候故、近年川下海手壺里余洲出申候、依之網場浅ク罷成、獵曾而無御座候ニ附、大勢之者共渡世難儀仕候、然処当浦方四里余西ゆり島之儀ハ網代能御座候、其上仁家も無御座候島之儀御座候間、当浦之獵場ニ被仰付被下候ハ、右獵師共々ゆり島江小屋掛等仕網方精出候ハ、御影ヲ以相立可申与奉存候、左候ハ、島相応之御運上銀等も差上可申候、願之通被為仰付被下候ハ、難有可奉存候、以上

元禄十六末年

十一月廿日

伊与郡浜村庄屋 覚右衛門  
同 組頭 甚 助

同 三右衛門  
同 次郎右衛門

松前浜村庄屋覚右衛門らが、由利島を自村の獵場にすべく、代官所に提出した願書がこれである。そして、二神村庄屋種次がこの申し出を完全に拒絶したこと、代官谷崎善助らも二神村の意向を尊重したことは、すでに述べてきた。

ここで注目したいのは、浜村漁師が由利島進出を目論んだ背景である。覚右衛門らの願書によれば、松山藩による大改修を経た重信川は、大量の土砂を吐き出すようになり、一里余りも「洲出」したという。松前浜村の海は遠浅となり、漁場が破壊されてしまった。城下町建設と新田開発を優先した松山藩の政策が、浜村漁師たちの獵場、ひいては暮らしを奪ったのである。彼らが由利島に進出した理由はここにあった。

さらに覚右衛門は、種次の嫡子種永の代の享保三年（一七一八）にも、「押して油利島へ入り込」む騒動を引き起こし、両者は激しいやりとりを繰り返している。<sup>(58)</sup>新四郎種永が覚右衛門に宛てた五月六日付書状の内容は次のようなものであった。

#### 〈史料18〉

「五月六日付書状」（前略）油利島鰯網代之儀御望之由、今年ハ鰯アミ御仕出被成候由御尤ニ奉存候、油利島之儀ハ近年怒和島ハ網入申候得共、今年ハ村方ハ網も仕度由ニ相談申候、左候ヘハ外ハ入網ハ相成不申候ニ付、左様ニ御心得可被下候（後略）

種永の主張はこうである。由利島の鰯網代は、近年まで同じ忽那諸島の怒和島漁師が引いていたが、今年から二神村が独自に操業することに



した。したがって「外より入網は相成り申さず」と、覚右衛門の要望を退けている。しかし、覚右衛門も負けてはいない。

#### 〈史料19〉

「七月二〇日付書状」(前略) 今度備後之内軀之者と寄合ニ網被成候由承り申候、然者他国之衆中と出合、万一喧嘩等も出来可仕哉と無心元奉存候、左候へハ御上江御苦勞申上候様ニ相成申候而ハ御国替り互ニ御為不成候間、喧嘩等不仕様ニ村方之衆中も被仰聞可然奉存候(中略) 兎角松前網油り島へ御指留被成候意味御座候者御上へ可被仰上候(後略)

覚右衛門は、この年の由利島網代が、二神村の自前操業でなく、実際は備後国鞆津の者との寄合網であることを知っていた。そこで覚右衛門は、次のような論理を展開する。万一、他国の衆中との喧嘩が発生したならば「御上へ御苦勞申し上げ」るが、同じ伊予国の「松前網」ならば問題はない。由利島に「お指しとめ」になる「意味」がある。お上にもそのように仰せ上げられるべきだろう。これに新四郎は激怒した。

#### 〈史料20〉

「七月二二日付書状」(前略) ゆり島江ハ外網一切入不申筈、得と申伝置候処、尔今油利島ニ居申由不届千万、其意得不申候(中略) 弥ゆり島ニ而ハ網引せ不申候、此上ニも我儘ニ居申候ハ、其意味可承候間、早々此元江御出可被成候、且又喧嘩等不仕様ニと被仰越、此方之網代ニ此元之網指置候所、何れハ喧嘩等仕出可申哉、是又難得其意候(中略) 兎角ゆり島ニハ古法之通り、此方之網計居申候得ハ、何等之子細も無之、上体へ之御苦勞ニ相成申事も無御座候、其元之網方江急度可被仰付候、御紙面之通、此元網之儀も鞆津ハ呼

下、早速油利島へ遣申候間、弥其方之あミ少も出入不仕様可被仰付候(後略)

由利島に「外網」は一切入れないと通達したにもかかわらず、浜村漁師がいまだに居座っているのは不届千万であり、理解しえない。こうしたからには、いよいよ網を引かせるわけにはいかない。さらに操業し続けるならば、その理由を承るから、早々に二神島へお出でいただきたい。また、喧嘩などしないようにと言っているが、どちらが喧嘩を仕掛けているというのか。なにはともあれ、「古法」のとおり、由利島には二神村の網だけが入れるのであり、藩に面倒をかける筋合いのことではない。二神村の網は鞆津の者を呼び寄せ、すぐに由利島へ遣わす予定であるから、いよいよもって、その方の網の出入りは一切できないように仰せ付けられるだろう。

新四郎の怒りは激しかった。しかし、覚右衛門は一步も引かない構えである。

#### 〈史料21〉

「七月二三日付書状」(前略) 私網之儀、油り島網代ニ而引申所、御引せ被成間布之旨、得其意不申候、拙者共方之獵師共ニ茂古法御座候、依之前方度々得御意候之處、貴様御勝手之被仰聞様、是以得其意不申候、尤鞆津ハ網御呼下し之由被仰下候へとも、此儀も不被仰下候而も先達而委細承届ケ居申候、私網ゆり島立除申様ニと被仰付候段、扱々得其意不申候、其元古法有之由被仰付候、左様之意味も御座候者御上体へ御願可然存候(後略)

私の網を由利島で引かせないというのは納得できない。浜村漁師にも「漁業勝手たるべし」という「古法」がある。にもかかわらず、「貴様、

「ご勝手の仰せ聞かされよう」は理解できないことである。軀津の網を呼び寄せていたとしても、あるいは呼び寄せていなかったとしても、私の網を由利島から立ち退かせようとは、それにしてもまったくもって理解に苦しむ。そちらに「古法」があるというならば、お上に訴願すべきだろう。

この激しい応酬が、和談にいたるはずもなかった。翌年の裁許で松前浜村は敗訴し、結果的に二神村の由利島權益が認定される。松前浜村の漁師たちは、その威勢のよさとは裏腹に、伝統的ななりわいと暮らしを急速に失っていったのである。

松前浜村の漁師たちは、同じ伊予郡内の米湊沖にも慣習的に出漁してきた。ところが、寛永一二年（一六三五）に米湊村周辺の諸村が大洲藩領に編入されると、中世以来の自由漁撈特権を主張する松前浜村の漁師と米湊・尾崎・本郡・森各村の漁師との間に小競り合いが繰り返されるようになっていった。そして万治元年（一六五八）八月、松前浜村が武装船団を組んで出漁したことから、米湊沖合で大乱闘事件が発生し、ついに大洲側に死者一名を出すいわゆる「網代争論」と呼ばれる紛争にいたったのである。この事件は、松山・大洲両藩の対立にまで発展し、幕府の指示で土佐藩主山内忠義が調停に乗り出す騒ぎとなった。同年一二月、大洲藩領米湊・尾崎・本郡・森各村の漁場と松山藩領松前浜村の漁場とをともに入会とするという、忠義が提示した調停案を両藩が受け入れ、ようやく解決にいたっている<sup>(59)</sup>。

松前浜村漁師が由利島へ進出したのは、この網代争論から四五年後のことであった。これらの一連の出来事から、つぎのような考察が可能であろう。松前浜村漁師の漁場は、松山藩による大規模な治水・新田開発事業の展開、いわば近世的な農本主義政策の強行によって破壊され、さらに中世以来の「職人」的海民の漁撈特権も、松山・大洲両藩の境界線の論理によって実質的に封殺されてしまったのである。

「中世の海と山の論理<sup>(60)</sup>」が、水田農業中心の論理や境界線の論理を内容とする「近世の論理」によって否定され、飲み込まれていくさまが読み取れる事例といえるだろう。松前浜村漁師の「漁業勝手たるべし」という声高な主張は、かえって彼らのおかれた状況の厳しさを物語っていたのである。

## 結びにかえて——海域・伝統・由緒

### （一）近世の海域支配

中世の論理を近世の論理へと比較的用意なくアジャストさせ、「海と山の論理」を貫徹することに成功したのが、あるいは二神村であったのかも知れない。そのために二神家や島民（村人）がはらった努力には、もちろん相当なものがあつた。

二神島・由利島に加えて複数の無人島を属島として領有することで、二神村は忽那諸島のなかでも最大級の海域支配を実現してきた。それは土地の論理や境界線の論理に基づくもので、いわば近世にふさわしい領有であった。

その領有は近世の村を前提としており、中世のような領主支配では決してない。河野氏の滅亡とともに二神島へ帰った二神家は、中世の「海の領主」から近世の「島村の庄屋」、つまり行政村二神村の庄屋へと転身していった。初代の庄屋役を勤めた二神種忠の時代、中世には二神氏の氏寺であった安養寺が、近世前期の延宝四年（一六七六）以降は、道後の石手寺の末寺とされ、二神村の檀那寺に変わっている。安養寺は本末制度、二神村の村人は寺檀制度へと、それぞれが近世的な制度のなかに、否応なく組み込まれていったのである<sup>(61)</sup>。

近世の各時期の二神家当主とその子息は、二神村の庄屋に就任しただけでなく、時に応じて島方の改庄屋や大庄屋をも勤めて、苗字御免の特権を許された。二神家文書によって判明する、種永から種章まで三代の

伊予二神島の近世

表 二神家系図・由緒書関係史料一覧（第一次文書分）

No.	標 題	作成・書写年代	作成・書写者	受 取	備 考	文書番号
1	二神藤原氏子孫系図之大段次第	享保 17. 8 (1732)			種永三男・寛隆（慈応）の系図下書（端書のみ）、No. 2 以下の種章の筆跡に一致	313-38
2	藤原氏嫡流并豊田二神之子孫系図写	安永 5. 3 (1776)	二神新四郎藤原種章		「系図写下書」	313-374-1
3	藤原氏豊田二神之嫡流系図抄書	安永 5. 3	二神新四郎種章		「嫡系抜書」	313-374-2
4	藤原氏豊田二神先祖并中興之霊会日年忌録（録）	安永 5. 4	二神新四郎種章		過去帳下書か	313-374-3
5	（過去帳）	安永 5. 仲春日	当主二神藤原種章		後年、加筆あり	
6	油利島（寛文 2 ～安永 7）	（安永 7）	新四郎			313-5
7	百合島録	（安永 7）	二神新四郎種章			313-71
8	豊州森久留島信濃守家系図（写）	（安永 8. 8. 10）		（二神種章）		313-72
9	予陽河野盛衰記（抜書）	安永 9. 初夏写	二神種章			313-74
10	予陽河野家譜人数之巻				種章の筆跡	313-378
11	（村上氏系図）				種章の筆跡	313-312
12	二神家末家之次第	安永 10. 正	二神藤右衛門種章		「尋古記改之」	313-76
13	柳原家系譜（下書）	安永 10. 正	二神藤右衛門種章	（柳原嘉七昌方）		313-75
14	（柳原家由来書写）				種章の筆跡	313-313
15	（二神氏系図）	（安永 7 以降）			記載は種章とその子の代まで、種章の没年なし、種章の筆跡	313-78
16	（豊田二神氏子孫系図略）		二神藤右衛門種章	饒豊田家	饒豊田家では不受理	313-77
17	（二神家由緒につき書付）				種章の筆跡か（未確定）	313-311
18	二神村新四郎由緒親類附	天保 5(1834)～				313-103

庄屋以外の役職は左のとおりである。

新四郎Ⅱ種永…宗門改役、居村庄屋役、改庄屋役、「御流人」預、年行事役、豊前国御城米船改方、

平九郎Ⅱ種信…居村庄屋役、改庄屋役、御巡見様御通船御用、大庄屋格（二神新四郎と改称）、大庄屋役

藤 次Ⅱ種章…朝鮮人來朝御用、津和地村庄屋並、居村庄屋役、郡帳面方相見、郡方新地普請所御用、津和地村御用船通船御用掛、郡方御敷床御用掛、畑里村・長師村地坪御用掛、郡役人代勤、津和地村預庄屋、郡役人代、改庄屋、南京人通船の節出精

二神種信（明和二Ⅱ一七六五年没）は、二神村庄屋のほかに島方の改庄屋、大庄屋格を歴任して二神姓の公称を許され、御巡見様御通船御用の大任も果たした。その嫡子の種章（寛政六Ⅱ一七九四年没）は、父の存命中から朝鮮人來朝御用や御茶屋のある津和地村の庄屋並として活躍し、居村庄屋役を継承後は津和地村の預庄屋、御用船通船御用掛、あるいは郡役人代まで勤めた。中世という時代の荒波を乗り越えた二神家は、近世という時代に適応し、間違いなく新たな存在感を示していた。

二神島は行政村「二神村」となり、松山藩からの年貢を村請けし、御城米船などの御用船通航に關与することで近世の海上交通網のなかに自らを位置づけ、長崎貿易に不可欠な煎海鼠の生産を請け負い、朝鮮通信使の來朝御用をも果たすことで、いわゆる「鎖国」政策にも適応してみせた。一八四〇枚にもおよぶ明・清・ペトナムなどの古銭が二神家に伝来しているのは、そうした事実と無関係ではないだろう。

## (二) 由緒の創造と新しい結合——「二神島庄官」という意識

しかしながら、近世の二神家のこうした姿が、中世の全否定のうえに存在したわけではないことも確認しておくべきであろう。

すでに紹介してきたとおり、明和五年（一七六八）、新四郎種章は松山藩の由利島収公計画に直面した。種章は「島村の庄屋」として松山藩に命懸けの抵抗をしたが、そのさい抵抗の根拠となったのは、二神村百姓による由利島の使用実態と、二神島と由利島の歴史であった。種章による歴史研究は、由利島防衛の理論武装のために始まったが、いつしか二神村周辺地域の歴史だけでなく、二神家の系譜を見直すことにつながった。

収公計画から七年後の安永四年（一七七五）九月、種章は由利島に矢立大明神由利明神社（のちの由利神社）を建立した。彼は社殿の棟札に「一、建立願主 二神島之住庄官 二神新四郎藤原種章」と自署した。二神村庄屋新四郎などではなく、あえて中世的な「庄官」を肩書とし、藤原氏を称したことは象徴的である。種章の自意識内に再版された「海の領主」の矜持が垣間見える。

安永七年（一七七八）には、由利島関連史料を収録した『油利島』と題する記録集、由利島にまつわる伝承をまとめた『百合島詠（録）』を作成している（表参照）。この時期の種章は、大友義統書状・河野通直仮名書出・豊臣秀頼書状などの古文書類、さらには『予陽河野盛衰記』『予陽河野家譜人』『忽那開発記』などの記録類を、歴史研究用に精力的に書写収集している。藩権力と対峙し由利島を死守した種章は、駆り立てられるように二神村の歴史の調査・研究を行い、「海の領主」二神氏による中世以来の海域支配の意識を焼き直していったのである。

海域支配の歴史は二神家・二神一族の由緒と不可分のものである。種章による歴史研究は必然的に家系図作成に結び付いた。由利島防衛のための理論武装の必要性に加えて、この時期、近親者の早世が相次いだ

こと、系図・由緒書の作成が各地で流行していたことなども、種章による系図作成を後押ししたに違いない。<sup>(64)</sup>

注目すべきなのは、種章が系譜研究・系図作成をとおして、豊後森藩の得能二神家や妻の実家にあたる柳原二神家（風早郡柳原村）、あるいは饒村の豊田家など、各地に散在していた二神氏諸流諸家・縁者と一族の交流をもつようになっていったことであろう。

豊後森藩士の得能二神家との交流が始まったのは安永六年四月四日のことであった。この日、得能新三郎とその子息の二神国次が種章を訪ね、本島二神家の系図や左文字則光の腰物などを見ながら、系譜の話をしていった。<sup>(65)</sup>以来、両家は手紙をやりとりして、情報交換をはかっている。得能二神家は系譜上は通範の次男伝兵衛尉（田兵衛）種房の流れだが、新三郎の四代前にあたる種春は二代藩主久留島通春の五男通音（左近）で、得能主水と名乗り家老職などを勤めた。<sup>(66)</sup>新三郎が伊予の名族得能姓を名乗っていたのはそのためであった。

詳細を述べる紙幅はないが、二神司朗家文書のなかには、豊後森藩主久留島家の朝鮮出兵や歴代系譜にかんするメモ書きが残され、その情報は種章が作成した「豊田藤原氏子孫系図次第」（卷子五）の内容に活かされた可能性がある。矢立大明神由利明神社の建立は両家が出合った年の九月のことである。これも偶然ではないだろう。交流が本島二神・得能二神両家の系譜研究・系図作成の意欲をたかめたことは想像に難くない。「豊田藤原氏子孫系図次第」は、通範の子通種が「久留島越後守」に属して文禄・慶長の役に出征したと伝えている（史料3）<sup>a</sup>。これなどは、種章によって編集された一族全体の「水軍の記憶」の断片なのかも知れない。

萬井良大氏は、本島二神家（二神司朗家文書）と柳原二神家（伊予史談会文庫）の系図を比較検討し、種章の筆になる「藤原氏嫡流系図写下豊田二神通範」（卷子七）は柳原二神家の「藤原氏元祖系図」を写したも



のであり、逆に柳原二神家の「豊田藤原氏子孫系図次第」は種章が作成した同題目系図（巻子五）の写しであることを明らかにしている。<sup>68</sup>

また、「豊田藤原氏子孫系図次第」などによると、怒和島の柳原権兵衛家との縁戚関係は、八右衛門種忠（種章の高祖父）の代に始まり、種信・種章の時代にはさらに緊密化している。種章の母は柳原権兵衛昌富の娘であり、姉おわさは同権兵衛敷昌に、娘お筆も柳原嘉七昌方に嫁したほか、叔父種置は敷昌家へ婿養子に入って別家を立てている。

二神司朗家文書のなかには、安永一〇年（二七八一）付の「柳原氏系譜」と題する系図の下書が伝来している。奥書によれば、種章は「古記」を参照して「婿」柳原権兵衛の家の系譜を研究し、松山の中山民衛の協力のもと「系図巻物」を仕立てたという。種章が「柳原氏系譜」を作成した背景には、おわさ・お筆の早世という事情があったものと推察される。それにしても、自村・自家にとどまらない系譜研究・系図作成活動の事実、種章の歴史研究への熱意を如実に示している。

以上のように、表に一覧した「豊田二神藤原氏子孫系図略」「藤原氏嫡流并豊田二神之子孫系図写」「二神新四郎由緒親類附」などの系図類の成立は、種章による一族間の交流と不可分のものであった。中世の「衆」は解体したが、近世中後期には「家」あるいは一族の新たな結合の形が育まれていたことが明らかであろう。その一族のネットワークは、近世になって育まれた歴史意識を背景に、武士身分も庄屋・百姓身分も超えていこうとするもので、近代以降の「家」や親類中の人間関係へと繋がっている。

## 注

（1）二神氏諸流については二神系譜研究会の会誌『海の民 ふたがみ』を参照。なお本稿では、二神氏嫡流を二神家もしくは二神宗家と表記したが、近世二神島に成立した「家」であることを強調する場合は、二神系譜研究会の系譜分類「本島二神氏」にならって、本島二神家と呼んで

おきたい。

（2）関口博巨「日本常民文化研究所と二神司朗家文書」（『海の民 ふたがみ』創刊号、二〇〇〇年）。

（3）報告の概要は、すでに別稿「近世の二神家と二神島」（『忽那諸島の歴史を訪ねて』松山市教育委員会編、二〇一二年、所収）で紹介している。しかし別稿では、紙幅の都合で大幅に史料や分析などを割愛したので、ここに改めて原稿化することにした。

（4）神奈川大学日本常民文化研究所編『二神司朗家文書 中世文書・系図編』（神奈川大学日本常民文化研究所、二〇一六年、以下『中世文書・系図編』と略称する）巻子五。

なお、本稿成稿（二〇一五年五月）後、前田禎彦「解題『二神司朗家文書 中世文書・系図編』」に触れた。以下（一）（二）項の校正に際して同解題を参照したが、残念ながら成果を十分に活かすできなかった。

（5）『中世文書・系図編』一一。

（6）石野弥栄「河野氏の守護支配と伊予海賊衆」（『愛媛県歴史文化博物館 研究紀要』第一号、一九九六年）、同「河野氏の時代と二神氏」（『海の民 ふたがみ』第三号、二〇〇一年）、福川一徳「伊予二神氏と二神文書」（『四国中世史研究』第六号、二〇〇一年。また、二神英臣「二神通範とその周辺」（『海の民 ふたがみ』第一号、二〇一〇年）も参照。

（7）『中世文書・系図編』三一―三。後掲〈史料1〉を参照のこと。

（8）景浦勉「二神氏の出自とその動静について」（『大山積神社関係文書』伊予史料集成刊行会、一九七七年）。

（9）網野善彦「伊予国二神島をめぐって」（『歴史と民俗』第一号、一九八六年）。

（10）『中世文書・系図編』三一―二。

（11）二神島夫銭・年貢銭等注文（『中世文書・系図編』三一―一）や夏麦年貢納帳・渡帳（『同右』三一―三）による。

（12）年貢銭・夫銭等注文（『中世文書・系図編』四―一）による。

（13）『中世文書・系図編』二―五。

（14）山内譲『海賊と海城』（平凡社、一九九七年）。

（15）中島町誌編集委員会編『中島町誌』（中島町役場、一九六八年）。

（16）本書所収の田上繁「瀬戸内海二神家の近世的対応に関する試論」は、二神島における土地所持の実態説明を通して、二神家を含む家同士の土地を媒介とする結びつきを明らかにしている。また、同論文註

(5) (6) に引かれている田上のこれまでの研究によれば、石盛は生産高ではなく年貢高を示す用語である。この点からも、『中島町誌』の近世二神島のイメージは見直す必要があるだろう。

(17) 『中世文書・系図編』巻子五。

(18) 二神司朗家文書には、戸田検地の検地条目が現存する(『中世文書・系図編』二一六)。

(19) 『寛政重修諸家譜』などによれば、久留島家当主のうち朝鮮出兵したのは、慶長二年(一五九七)に蔚山で討死した来島通総とその嫡子で豊後森藩初代藩主の来島長親の二名である。また、越後守に叙任されたのは、長親の嫡子で、来島を久留島に改めた通春(一六〇七〜五五)だけである。したがって、a部分の記述は牽強付会といわざるを得ない。通春の五男種春は、家臣二神伝兵衛種親の養子となり、得能姓を名乗る(得能二神家)。あるいは「久留島越後守」という記載は、安永期の本島二神家と得能二神家との交流の痕跡なのかも知れない(後述)。

(20) 二神司朗家文書三一三一〇三。

(21) 同右 三一三一六。

(22) 同右 三一三七六。

(23) 前節(二)で述べた通り、瀬戸内海の島村は必ずしも農村ではないし、そこに住む百姓も農民ばかりではない。だとすれば、武士と百姓への身分・居住地の分離・固定政策を「兵農分離」と表現するのは必ずしもふさわしいことではない。適切な概念とはいえないが、ここでは「兵」「農」未分離という言葉を一時的に使用した。

(24) 二神司朗家文書三一三一九九。

(25) 豊田渉「二神氏ゆかりの地を訪ねて No.2 二神島」『海の民 ふたがみ』第二号、二〇〇一年) 参照。

(26) 『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之三』一四九三。

(27) 「二神村新四郎由緒親類附」(二神司朗家文書三一三一〇三) による。

(28) 鴨頭俊宏「近世前期における瀬戸内海交通と津和地」『伊予史談』三四四号、二〇〇七年)、同「公儀浦触山陽ルートと松山藩の情報ルート(上)」『伊予史談』三三九号、二〇〇五年)。

(29) 「二神氏末家之次第」(二神司朗家文書三一三七六) ほか。

(30) 二神司朗家文書三一三二四八。

(31) 『日本財政経済史料一』延宝元年二月日付「船足御定」、正徳二年八月付御年貢米御廻船取締方触書(『御触書寛保集成』二四二六〜二二)。

た、石井謙治『ものと人間の文化史 和船I』(法政大学出版局、一九九五年) 参照。

(32) 二神司朗家文書三一三二四八。

(33) 菅原憲二「伊予国和気郡興居島村(現愛媛県松山市) 堀内家文書(三)」(『千葉大学人文研究』第三七号、二〇〇八年)。

(34) 二神司朗家文書三一三二七一。

(35) 網野「伊予国二神島をめぐって」。

(36) 二神司朗家文書三一三二五。

(37) 記録「由利島」には「和気郡苅屋村」とのみ記され、網野前掲論文はこれを備中国和気郡と理解している。しかし、備中国和気郡には苅屋村という地名がないので、これは伊予国和気郡と考えるのが妥当であろう。

(38) 二神司朗家文書三一三一六。

(39) 二神司朗家文書三一三二九四〜九七。

(40) 河岡武春『海の民』(平凡社、一九八七年)。

(41) 「儀光寺縁起書写」(儀光寺蔵) ならびに筆者の聞き書きメモによる。また、豊田渉「二神氏ゆかりの地を訪ねて No.3 由利島(愛媛県中島町)」『海の民 ふたがみ』第三号、二〇〇一年) も参照。

(42) 二神村でも宗門人別帳が作成されていたはずだが、残念ながら発見されていない。

(43) 二神司朗家文書四二〇一三四一九四〜二七一二。

(44) 二神司朗家文書四二〇一三四一九四〜二七一二。

(45) 二神司朗家文書四二〇一七一一四五一四。

(46) 二神司朗家文書四二〇一三、三四、三九など多数。

(47) 大成経凡「石造物が語る海民ロマン」(『海の民 ふたがみ』第三号、二〇〇一年)。

(48) 二神司朗家文書四二〇一七一一二五一一。

(49) 二神司朗家文書三一三一五。

(50) 景浦勉「農民騒動構造の変遷」(同編『伊予近世社会の研究(上)』関奉仕財団、一九九三年など)。奉行の穂坂太郎左衛門はこの一揆の責任をとられ二神島に流罪となっている。偶然であろうか。

(51) 『史料13』から『史料15』は、「由利島」(二神司朗家文書 三一三二五) から抜粋して引用した。

(52) 網野善彦「二神島の調査から見えてきたもの」(『海の民 ふたがみ』第一〇号、二〇〇六年)。

- (53) 網野善彦「中世前期の瀬戸内海交通」(『海と列島文化 9 瀬戸内海の海人文化』小学館、一九九一年)。
- (54) 富田泰弘「伊予松前城下町の復原に関する歴史地理学的研究」(足利健亮先生追悼論文集編纂委員会編『地図と歴史空間』大明堂、二〇〇〇年)。
- (55) 大石慎三郎『江戸時代』(中公新書、一九七七年)。
- (56) 土木学会編『明治以前日本土木史』(岩波書店、一九三六年)、『松前町誌』(一九七九年)、『愛媛県史 地誌Ⅱ(中予)』(一九八四年)など。
- (57) 二神司朗家文書 三一一—五。
- (58) 〈史料18〉から〈史料21〉は、「由利島」(二神司郎家文書 第一次五)から抜粋して引用した。
- (59) 『松前町誌』(一九七九年)。
- (60) 中世の論理Ⅱ海と山の論理Ⅱと言っているわけではない。中世においても農業の論理は存在する。
- (61) 橘川俊忠・関口博巨「二神司朗家文書の整理と研究」(『海の民 ふたがみ』第五号、二〇〇三年)のうち、関口「石手寺と二神島安養寺の本末関係の形成」。
- (62) 網野「伊予国二神島をめぐる」、白水智「二神家伝来の古銭について」(『歴史と民俗』第一三三号、一九九六年)、永井久美男「近世銭貨の流通——二神家伝来古銭の調査を中心として」(『歴史と民俗』第一四号、一九九七年)。
- (63) 西和夫「二神島と由利島の建築——一九九五年度の調査結果について」(『歴史と民俗』第一三三号、一九九六年)。
- (64) 萬井良大「解題『豊田藤原氏子孫系図次第・藤原氏嫡流系図』」(神奈川大学日本常民文化研究所『二神司朗家文書 中世文書・系図編』二〇一六年三月)。
- (65) 一八世紀後半から一九世紀は由緒の大衆化の時代といわれる。久留島浩「村が『由緒』を語るとき」(久留島浩・吉田伸之編『近世の社会集団』山川出版社、一九九五年)、山本英二「由緒、その近世的展開」(『日本歴史』六〇〇、二〇〇〇年)ほか参照。
- (66) 二神司朗家文書三一一—六九。この文書の翻刻は「連載 二神古文書の解説 第三回」(『海の民 ふたがみ』第四号、二〇〇二年)に掲載されている。また、両家の交流については田上繁「二神家の近世的対応に関する試論」も参照のこと。

- (67) 福川一徳「伊予二神氏と二神文書」、竹野孝一郎「豊後森二神氏の四〇〇年」(『海の民 ふたがみ』第四号、二〇〇二年)ほか参照。
- (68) 萬井良大「解題『豊田藤原氏子孫系図次第・藤原氏嫡流系図』」。